

博士 (2017 年度)

宮沢賢治・しくじりの軌跡と構造 ——同行する媒介者をめぐる社会学的探求——

筒井 久美子

1. 問いの所在

宮沢賢治の生涯は「しくじり」の連続であった。盛岡高等農林学校（以下、高農）卒業後、3 年 9 か月の間迷走し、その後も教師にも百姓にも技師にもなり損ね、生涯、迷走を続けている。本稿は賢治の作品・手紙・手帳等や周囲の人々の証言などを主な資料として彼の生活史に迫り、賢治の「しくじり」の軌跡と構造を明らかにする試みである。賢治には「ぼくらはいっしょにもっと幸にならう」という願いがあり、賢治はこの願いに向かって共に行く者を求め続けていた。このような存在を捉えるため、本稿では「同行する媒介者」という概念を提起し、「同行する媒介者」に注目しながら賢治の生活史を読み解いていく。序章（願いに向かって共に行く者）では、問いを設定したのち賢治の生涯を概観した。

2. 先行研究および理論枠組みの検討

1 章（先行研究および理論枠組みの検討）では、先行研究と理論枠組みの検討を行った。

従来の賢治研究は、賢治と賢治の妹の宮沢トシや親友の保阪嘉内との二者関係に注目している。一方、社会学的視点から賢治を扱った見田宗介は、賢治の「存在の祭り」の中への自己解放の実践を描き出す。しかし、いずれの研究も賢治が求めていたのは賢治と〈共に行く者〉と価値志向という三項図式であった点を見落としている。〈共に行く者〉については D・W・プラスの「コンボイ」概念、R・ジラルの「媒介者」概念を検討した。「媒介者」概念は主体は「媒介者」の客体に対する欲望を模倣していることを明らかにし、〈共に行く者〉に加え価値志向をも含み込んだ視座を提起している。作田啓一は、普遍性・営為を志向し普遍主義的な基準に適うような真や美を求めて現在の秩序を乗り越えようとする「芸術家」と、逆に、個別性・存在を志向し他者との調和を重視し秩序と和解しようとする「生活者」という概念を提起する。「生活者」から見ると「芸術家」は「生活者」が重視する他者との調和を破壊する「罪人」とであるという対立関係にあり、作田が提起する「とがめる媒介者」は「芸術家」を「生活者」の立場からとがめる存在である。本稿では作田の議論を踏まえ、〈共に行く者〉を捉えるため、主体と同じ価値志向に準拠し、主体と共にその価値志向へ接近しようとする「同行する媒介者」という概念を提起した。

3. しくじりの軌跡と構造

2 章～7 章では、高農卒業後の賢治の生涯を迷走期、農学校教師時代、羅須地人協会時代、東北砕石工場技師時代とその前後の病床期に区切って検討を加えた。

大正 7 年 3 月に高農を卒業したのち 3 年 9 か月の間、賢治は職業と宗教をめぐって迷走する。2 章（共に行く者・とがめる者——2 人の媒介者をめぐって）ではこの迷走期を扱った。迷走期の「同行する媒介者」は高農時代の親友・保阪嘉内である。この時期の賢治は「同行する媒介者」と「とがめる媒介者」という矛盾する「媒介者」のいずれとも共に行

こうしてジレンマに陥るとともに、両者との間に葛藤を抱え、迷走することになった。

高農時代、自分とみんなとに幸をもたらすという「絶対真理」を求めようと共に岩手山で誓いを立てた嘉内は、賢治にとって「絶対真理」に向けて共に歩む「同行する媒介者」となった。賢治は嘉内と共に法華経信仰によって「絶対真理」を求めようとするが、嘉内は法華経信仰ではなく、故郷を「花園農村」へと改良する「農人」活動へと進んで行く。法華経信仰と異なり、「農人」活動は「みんな」にも認められる〈絶対真理〉を追求する方法であったため、賢治は嘉内に対して尊敬と羨望を向ける。大正10年、日蓮主義の在家集団・国柱会に向けて家出上京していた賢治の元に上京しようとする嘉内を押しとどめ、しかしその後、嘉内と決別すると賢治も故郷へ戻って行った。

一方、賢治が「絶対真理」という価値を設定したのは、父・宮沢政次郎が自分自身が獲得することを望み賢治にもそれを期待していた「社会的成功」から降り、「社会的成功」に対抗するためであり、賢治は政次郎にも「絶対真理」の価値を認めさせようとした。しかし、政次郎は、「社会的成功」を求めるところか『世間』の道徳にも従わない賢治をとがめる、「とがめる媒介者」であった。賢治は浄土真宗を信仰する政次郎に対しても日蓮宗へと改宗するよう迫り続けていたが、政次郎の期待に答えようともしていた。

大正10年夏、賢治は家出先から帰宅、12月には農学校の教師となり、大正15年3月までの約4年間、教師を続けた。この時期の賢治は作品世界において、現実世界で抱えた矛盾や葛藤を乗り越える方法を次々と編み出している。

3章(2つの別れの教訓——「正しいねがひ」と「たつたもひとつのたましひ」をめぐる)で扱った「同行する媒介者」は嘉内とトシであり、賢治は「同行する媒介者」と「正しいねがひ」との矛盾を乗り越えようとしている。大正10年7月、お互いとの関係性を「恋愛」という言葉で表現していた嘉内と決別、翌年の大正11年11月には信仰を共にしていたトシと死別する。賢治はこの2人との別れから、「みんな」と共に「みんなの幸」に至るという「正しいねがひ」を求める「宗教情操」と、賢治が共に「正しいねがひ」を追求しようとした「たつたもひとつのたましひ」を求める「恋愛」とは両立しないという問題を引き出す。心象スケッチ「小岩井農場」において賢治は、この問題を「さびしさ」と「正しさ」の二者択一問題として捉え、「たつたもひとつのたましひ」を断念し、「さびしさ」を「焚」きながらそれをエネルギーにして「正しいねがひ」へ進むことを「決定」した。

しかし、トシとの死別後、賢治はこの問題を、「みんな」(普遍性)と「たつたもひとつのたましひ」(単独性)の両立不可能性という問題として捉え直す。そして、童話「銀河鉄道の夜」第三次稿で、「三次元空間」に「第四番目の『方向』として〈時間〉を加えた」「四次元空間」を想定すれば「みんな」が単独的な存在であるという思想に至ることで、賢治は、「宗教情操」と「恋愛」を両立させる「宗教風の恋」という空間を確保した。この思想を踏まえ、「たつたもひとつのたましひ」と共に行く方法として、単独的な存在の集まりとしての「みんな」と共に「あらゆるひとのいちばんの幸福」に至るという方法を提起した。

4章(「よだか」を地上へ返す方法——「銀河鉄道の夜」第三次稿の検討を通して)では大正15年に羅須地人協会を始めるに至った賢治の思想に迫った。大正15年までには書かれたという「銀河鉄道の夜」第三次稿は、ジョバンニと「正しいねがひ」と「たつたもひとつのたましひ」という三項図式をめぐる物語である。「からだ」を持つ私たちは他者と殺し殺される関係性にある。ジョバンニは「よだかの星」のよだかのようにその関係性から

離脱するのではなく、その関係性の中を生きる最善の方法として、「みんなの幸」を求めるという「正しいねがひ」のために自分の「からだ」を使うという方法を獲得する。

ジョバンニとカムパネルラは共に「みんなの幸」を求めようと誓い合うが、「ほんたうのさいはひ」の在り処について2人の見解の相違が明確になるとカムパネルラは消えてしまう。この2人の葛藤は、「みんなの幸」を求めようと誓い合ったものの法華経信仰と「農人」活動という別の道へ進み決別に至った賢治と嘉内の葛藤を反映している。ブルカニロ博士はジョバンニに、「ほんたうのさいはひ」を求めるため、「勉強」して「四次元空間」へ至り、時代や社会によって異なる「きれぎれの考」を「ほんたうの考」と「うその考」に分ける「実験」の方法を決めよという。賢治は「四次元空間」へ至る「勉強」によって主体である自分と「同行する媒介者」との間に抱えた葛藤を乗り越えようとしたのである。

5章（農学校教師を辞めさせたもの——花巻農学校教師時代の媒介者たち）では農学校教師時代の現実世界を扱った。大正15年3月、賢治はのちに「楽しかった」、「やり甲斐」があったと振り返る農学校教師を辞めてしまう。この「しくじり」は、賢治が「同行する媒介者」を凌駕する「同行する媒介者」を見出したために引き起こされている。

農学校教師となった賢治は、演劇実践や夜の散歩など「遊び」という手段で生徒たちを「同行する媒介者」としてかれらと共に「芸術家」へ向けて歩むことが叶っていた。しかし、賢治は嘉内を模倣して生徒たちに百姓になれと教えながら、嘉内と異なり自分自身は農業に従事していないことに「心苦しき」や「矛盾」を感じていた。そこで、「銀河鉄道の夜」第三次稿の思想に到達した賢治は、「本統の百姓」になり、嘉内＝「たつたもひとつのたましひ」と農民たち＝「みんな」と共に「あらゆるひとのいちばんの幸福」に向けて歩むために、教師を退職したのである。なお、政次郎は賢治が農学校教師になることに賛成していたため、この時代には政次郎との間には葛藤が生まれにくかったと考えられる。

6章（「地人」を目指すのは誰か——羅須地人協会時代の問題構造）では羅須地人協会時代を扱った。大正15年4月、農学校教師を辞めた賢治は作品世界で獲得した方法を現実世界で実現するため、実家を出て宮沢家の別荘に移り羅須地人協会活動を始めるが、分裂した「同行する媒介者」のいずれとも共に行こうとして「しくじる」ことになる。この時期の「同行する媒介者」は農民たちである。

活動を始めた賢治は、「本統の百姓」になって「芸術」という手段によって農民たちと共に「地人」へ至ろうとしていた。賢治の作品世界の農民たちは、「ぼくらはいっしょにもっと幸にならう」と言って「地人」を志向していた。しかし、現実世界の農民たちの多くは「生活者」を志向し、賢治をとがめる「とがめる媒介者」であった。そこで賢治は、作品世界の農民たちだけでなく、現実世界の農民たちとも共に「地人」に至るため、「芸術」に加え「技術」という手段にも力を入れる。しかし、「芸術」と「技術」両方に注力した結果、賢治の「からだ」は破綻する。昭和2年夏、賢治は実家に帰り病臥することになった。

7章（現実世界のファゼーロ——病床と東北砕石工場技師の時代）では、東北砕石工場技師時代とその前後の病床期を検討した。昭和6年2月、賢治は鈴木東蔵が工場長を務める東北砕石工場の技師になる。この時代の「同行する媒介者」はまずは東蔵であり、技師の仕事は「みんな」と共に「あらゆるひとのいちばんの幸福」へ向かう新たな方法であるかに思われた。しかし、賢治は「同行する媒介者」としての「みんな」の中に葛藤を見出し「しくじり」へ至る。

羅須地人協会時代の「地人」を求めた「家出」もまた、政次郎からとがめられる。しかし、東北砕石工場技師の仕事は政次郎からとがめられることはなかった。また、この仕事は「不良土壌改良唯一の物」である石灰肥料を販売することで「技術」という手段で農民たちと共に「地人」へ向かう実践であり、農家出身で苦学を重ねたすえ工場によって農村を救済しようとしていた東蔵は「地人」を志向する「本統の百姓」であった。

しかし、技師になった賢治は、自分は嘉内との岩手山の誓いから離れ、「おちぶれ」、「屈撓」し、「生活者」になり果てたと自らの手帳に書きこんでいく。なぜなら、この仕事はある人から奪った稀少な「食みもの」を他の人へ与えることで、「みんな」の間に相剋を発生させる「鬼」のような業だと感じられたからである。昭和6年9月、賢治の「からだ」は再び破綻した。一方、現実世界では賢治を「しくじり」へと導いたこの方法は、童話「グスコーブドリの伝記」のグスコーブド리를賢治が理想とする生き方へと導いており、作品世界においては成功を収めることになった。

4. 結論と本稿の意義

終章（共に行くということ）では、まず、賢治の「しくじり」の軌跡と構造をまとめ、賢治の「しくじり」の構造は「同行する媒介者」と「とがめる媒介者」という2種類の「媒介者」と2種類の価値志向の布置連関として示すことが出来ること、また、賢治の「しくじり」はこの布置連関の中で賢治が抱え続けた矛盾や葛藤の帰結であったことを確認した。

続いて本稿の意義を確認した。本稿は従来の賢治研究に対して、賢治の生活史を三項図式を使って読み解くという新たな視点を提起し、二項図式を使った賢治研究では見落とされてきた賢治の「しくじり」の軌跡と構造を明らかにした。

また、本稿は「媒介者」概念に対して3つの新たな視点を提起した。まず、「媒介者」が主体と「同行する」という視点を提起した。「同行する媒介者」は、客体との距離において主体と同等の位置に存在しているため、主体が「媒介者」の欲望を媒介するという役割交代や、相互媒介関係が発生する。加えて、複数の「媒介者」が矛盾し合うという視点、また、複数の「媒介者」が時間的に継起していくという視点を提起した。「コンボイ」概念は、既存の概念に「時間の奥行き」を付け加え、「長期にわたる相互涵養の所産」としての成熟を捉える視座を用意したが、「同行する媒介者」概念は「媒介者」概念に「時間の奥行き」を付け加え、本稿ではこの概念を未成熟を捉える視座として活用したと言うことが出来る。

本稿では、主体と「媒介者」の関係性を立体化しダイナミックなものとして捉える視座を作り出した。これが可能になったのは、本稿がいずれの「同行する媒介者」も特権化せずフラットに扱ったためであるが、この結果、「同行する媒介者」の多様性もまた明らかになり、「同行する媒介者」概念自体を立体化させていくという新たな課題が開かれた。

東北砕石工場技師時代後、賢治は自身の作品の出版を弟に託し、「芸術」という手段で「みんな」と共に「あらゆるひとのいちばんの幸福」へ至ろうとしていた。嘉内は自分の息子に「グスコーブドリの伝記」を読み聞かせていたと言われる。臨終の日、賢治は政次郎に妙法蓮華経を1000部作成し配ってくれるよう遺言し、「宗教」という手段も使って「みんな」と共に「あらゆるひとのいちばんの幸福」へ至ろうとしていた。遺言を聞いた政次郎は初めて賢治を褒め、賢治死後、遺言通りに妙法蓮華経を作成・配布、のちに日蓮宗に改宗した。